

一 次の各問に答えなさい。

問一 次の――部のカタカナを漢字にしなさい。

- 1 コキヨウに帰る。
- 2 神社をサンバイする。
- 3 委員長をツトめる。

問二 次の――部の漢字をひらがなにしなさい。

- 1 慣習にしたがう。
- 2 仁義をつらぬく。
- 3 かみの毛を結う。

問三

次の――部の助詞と同じ意味で使われているものをあとのア～ウからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1 映画を見るのが好きだ。

ア 花の咲いている枝を折る。

イ 遊びに行くのをやめる。

ウ 今日はたかよしくんの誕生日だ。

2 天気はよいが、風が強い。

ア わたしも行くが、兄も行く。

イ こうじくんの絵を見たが、いい絵だった。

ウ お昼になったが、食事の用意がでなかった。

3 母にお使いを頼まれる。

ア 先生にほめられる。

イ 姉と買い物に行く。

ウ 後期の図書委員になる。

4 牛乳からチーズができる。

ア 学校から家まで歩いて帰る。

イ 暑いから窓を開ける。

ウ 一枚の板から机を作る。

二

聞き取りの問題です。先生の指示に従って答えなさい。

三

次の文章を読み、あとの各問に答えなさい。

大航海時代を過ぎてもアフリカは長いこと「暗黒大陸」と呼ばれていた。アフリカ探検が本格的になったのは、一八世紀後半からだ。その歴史は、ただか二〇〇年あまり。アフリカについての本を書いた人といっても、おそらく数百人だろう。だから、じっと見ていると、発見とまではいかないが「え？こんなこと本に書いてないよ」という場面に出くわすことがある。本を書く人たちは、限られたエリアの動物について調査し、書いているわけなので、必ずしもそれを一般化できるとは限らない。

ア ライオンの本。ライオンについて

本を書いている人は、数十人。しかもライオン全例を見ているわけではない。ところがそれが活字になって、世界中で出版されると、それを全世界、何億という人々が読んで、それを真実と思い込む。しかし、まちがいの多い。特に動物は物語が作りやすい、という性格上、著者の思いが事実を歪曲させやすい。

イ

「ゾウの墓場」という話をこぞ知ろうか。ゾウは自分の寿命を知っていて、死期が近づくと、ある場所に自ら行って、そこで息を引き取る。そこには死んだゾウの白骨が累々とあり、「ゾウの墓場」と呼ばれている、というものだ。ゾウの墓場……。本当にあるのなら、ぼくだって見てみたい。それは、こんな話から作られたのではないだろうか。ウ

洞窟があつて、たまたまそこにミネラル分の多い岩塩などがある。そこに、たまたまゾウがやってくる。ミネラルの多い岩塩に惹かれて洞窟に入ったけれど、出られなくなってしまう。上るときに怪我をして死んだとか……。後でそれを発見した人が、ゾウの骨が固まっているから、これはゾウの墓場に違いない、と。そんなことなら想像できる。

結論を先に出してそれに縛られるとか、人間の考えることはどうもパターン化してしまっているように思える。原始の人間はそんなことはなかっただろう。自分の目で見て自分で判断し、自分で一つ一つ覚えていかなければならない。命にかかわるようなことであれば、うかつに一般化することはできないはずだ。

ヒトが見たものを、意識の言葉に置き換えて理解しようとする、どうしても限界がある。ヒトの言葉はヒトがわかりやすいように作られたものだ。ヒトが、見たものを言葉に置き換えるのは、むしろ自然なことだとは思ふのだが、それはあくまで「便宜上」のことだということ、つい忘れてしまう。そのために誤解の範囲を広げてしまうということがあるのではないだろうか。ゾウの挨拶みたい。ゾウが出会ったときに、相手と鼻を絡ませ合う。それをヒトの言う挨拶のようなものと解釈して、「あれはゾウの挨拶行動である」と断言してしまうと、実はゾウにとっては、それは挨拶でもなんでもないかもしれない。ゾウは何百メートルも向こうからやってくる別のゾウを識別できるのだから、それをわざわざそばに来

て、「あ、〇〇さんだわ、こんにちは」とやるだろうか。自分たちの行動に照らし合わせて
わかりたいと思うのが、ヒトの特徴なんだろう。ライオンは「なぜゾウはあんなに鼻が長
いんだろう」なんて、おそらく思わないだろう。だからヒトも「**エ**」と思わずに、
「ゾウの鼻は長いんだ、最初から長いんだ」と思えたら、野生動物の見方も、考え方もずい
ぶん変わってくるのではないだろうか。

また、「ガラパゴスゾウガメは、成体、卵にかかわらず、流木などにつかまって、何らか
の形で大陸から流されてきた」というのが学者の「定説」だ。ガラパゴス諸島は数百万年前
に火山が隆起した島々だから、というのがその根拠だが、もともとここにいたという考え方
があってもいいのではないだろうか。ふだんの暮らしのなかでも自分の目で見る、というこ
とを、意識的にしていかなければ、と思うのだ。

そういう意味では、子どものほうが見方が自由だ。娘が小学校三年生のとき、オーストラ
リア・カンガルー島のヒツジの牧場に九カ月ほど住んだ。そのとき、ヒツジが日がな一日草
を食んでいるので、ぼくは彼女に「ヒツジさんて、なに考えてるんだらうね」と尋ねた。す
ると娘は「草だよ。草しか見てないよ」。確かに動物は食べることしか考えていないに違
ない。ぼくは思わず「⁴深いな⁵」とカンシンしてしまった。

(岩合光昭 『生きもののおきて』による)

問一 — 部1「それ」・2「それ」が指している内容をそれぞれ答えなさい。

問二 **ア**・**イ**・**ウ** に共通する副詞として最も適切なものを次の中から
選び、番号で答えなさい。

- 1 むしろ
- 2 たとえば
- 3 もっとも
- 4 まさに

問三 — 部3「人間の考えることはどうもボタン化してしまっている」とありますが、「パ
タン化」しているとはここではどのようなことですか、その説明として最も適切なも
のを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の過去の経験から物事の法則を見つけること。
- 2 動物の行動を人間の行動と見比べて考えること。
- 3 何事においても同じように考えてしまうこと。
- 4 物事を一般化して共通の認識を持つこと。

問四 **エ** にはどのような語を入れるのが適當ですか、十字程度で考えて答えなさい。

問五 — 部4「深いな」とありますが、どのようなところが「深い」のですか、本文中の
言葉を用いて説明しなさい。

問六 — 部5「カンシン」を漢字に直しなさい。

問七 本文の内容と合うものとして、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 人類は他人の言葉を信用しすぎてしまうことがあり、そのせいで「そんなことは
聞いてないよ」と思うことがよくある。
- 2 人は自分がわからないものや理解できないものを見つけると、それを調べもしな
いで勝手に解釈する傾向にある。
- 3 実際に見た内容を言葉に置き換えることは当たり前のことだが、それを完全に置
き換えることは難しい。
- 4 アフリカ大陸は一八世紀後半まで誰も足を踏み入れたことはなかったので、暗黒
大陸と呼ばれていた。

四 次の文章を読み、あとの各問に答えなさい。

九月になると、あたりの空気はいよいよ冴えわたる。太陽の輝きは鋭く、夏のなごりとどめているが、すでにアだった。

一郎と山本君は丘陵の尾根伝いに家路をいそいでいた。体の大きい中学二年の山本君が先にたつて、灌木の茂みをかきわけていく。山本君の足はしだいに速くなる。一郎もおくれまいとしていそぐ。夕日が茂みにさえぎられ、光と影が入り乱れて山本君の背中で踊っている。

二人は昼すぎから、木の実をさがしに山へいったのだ。しかし、ヤマブドウもコクワも、とるにはまだ早い。一郎は、まだ硬いコクワの実を五つ六つもいで、ポケットに入れていた。今日のところは、その場所を見つけておくだけだ。そうしておけば、実の熟するころ、熊の出没する山の中を、うろうろしないですむ。北海道の秋は、熊も冬眠にそなえて、食物をさがしながら山をさまようのだ。

「おい、待ってよ」一郎が叫ぶ。「もうすこしゆっくり歩いてよ」

山本君はふりかえって、笑いながら一郎を待った。

茂みの間から見わたすと、沢でくざられた小高い丘陵が、さまざまな表情でいくえにも重なり、果てしなくつづいている。

なめらかな緑の丘は採草地で、風が吹きつけると牧草が波をうち、白っぽい縞模様が浮き出た。つづく丘の上から、勢いよく茂ったミズナラの原生林があふれて、そのまま沢へ落ちて消える。ふたたび谷底から隆起した丘の斜面は放牧場で、牛たちがごま粒のように散らばっている。それを落葉松の林が帯のようにふちどっている。丘陵は波のうねりのように遠くつらなり、その果てのはるかかなたには、灰色の山並みがかすんでいた。

山本君と一郎は尾根伝いに、なおもやぶの中の道をたどる。

ふいに目の前がひらけた。そこは半島のようにつき出した丘のはずれだった。眼下には、起伏に富んだ台地にはさまれ、たんぼが長々とつづいている。その中を大きな川がひと筋、東西に横たわってきらきらと輝き、それに平行して空色の国道が一直線にのびている。

赤い夕日が野山を黄金色に染めあげた。

一郎は、丘のふもとからひろがっている自分のうちのたんぼを見おろす。

こんどは一郎が先にたつて、なだらかな丘の斜面をくだりかけたが、思わずその場に立ち止まった。さっきは、やぶの陰で見えなかったが、ずっと手前のたんぼのあぜ道で、なにやら話をしている二つの人影に気づいたのだ。一人はお父さんで、もう一人はおじさん、つまりお父さんの兄にちがいがなかった。二人のようすに、なぜか気やすく近づけない一種異様な

きびしさが感じられたのだ。

おじさんがなにごとか話をしている間、お父さんは腕組みをして下を向き、ときどきうなずいている。それから二人はじっとたんぼに目をそそいだが、その顔は稲を見ているのではなかった。

そのたんぼでは、もう九月だというのに、稲はまだ鮮やかな緑色をしていて、まっすぐ立ったままである。穂には実がはいっていないのだ。いつもの年ならば、すでに黄色みをおびた稲が、いっぱい実のつまった穂をたれて、人間には感じられないほどの風にも、さわさわとそよいでいるはずである。

今年の北海道は冷害にみまわれ、ことに北部地方は大凶作だった。北部の内陸にある一郎の村では、七月になって雨や曇りの日が多く、気温が十七度以上になることはまれだった。水田の稲にとって、幼穂が発育し穂が出るまでのこの時期に、照りつける日光が必要なのである。

そのころすでに、低温のため大幅な減収が予想されていたが、霜によって被害がさらに大きくなる恐れが出てきた。一郎のうちでも、山本君のうちでも、部落で米を作っている人たちは、たんぼのあぜ道に古タイヤをならべて、警戒態勢にはいっていた。

とうとうその日が来た。午後四時、気象通報所から降霜注意報が出された。そして夜の十時、気温が一度までさがったことを知らせるサイレンが鳴った。重苦しいサイレンの音は、まわりの丘にこだまして四方八方から聞こえてくる。あぜ道の古タイヤに火がつけられる。広大な闇の中で、炎は夜どおし漁火のようにゆれていた。

長い夜がおわり、東の空が白みはじめる。もうもうたる煙が地を這い、薄明の空に吸いこまれていった。

こうして霜はなんとか防いだが、低温だけではどうしようもない。八月も中ごろ、気温が高くなり、数日間日ざしの強い夏らしい日がつづいたが、すでにおそかった。それで、この地方における今年の米の出来ぐあいは、平年作の十五パーセント程度という予想である。

一郎は気をとりなおして、丘のゆるい斜面をくだっていく。山本君もそれにつづく。丘のふもとのネコヤナギの茂みをくぐり、小川の一本橋をわたり、たんぼのあぜ道にはいると、二人のおとなはようやく、一郎と山本君のほうをふり向いた。お父さんは腕時計を見て、おじさんをながし、歩きだした。

お父さんもおじさんも、気味がわるいくらいだまりこくっているの、一郎も話しかけるのをためらった。

(これじゃ、まるでお葬式の行列だ)

灌漑用水路をわたり、広い砂利道に出ると、お父さんは立ち止まって、たんぼをふりかえ

り、やっと口を開いた。

「おい、一郎、うちは来年から、米を作らないことにきめたぞ。⁶ 酪農⁶をやるんだ」
「酪農？」

「そう、酪農だよ、どうだい」

いきなりそういわれても、一郎はお父さんの顔を見あげるばかりで、言葉⁷が出ない。

「今、おじさんとそのことを話し合っていたんだ」

この部落の農家は、ほとんどが稲作専業だった。酪農家、つまり専門に牛を飼って乳をしぼっている農家は、川からはなれた台地の陰にある二軒^{けん}だけである。

一郎の村のある北部の内陸地方は、北海道でもいちばん寒いといわれるところだった。この地方の稲作は、五年に一度のわりで、ひどい冷害をうけた。

二十年前には、この部落で米を作っている農家は、ほとんどなかった。一郎の家でも、そのころは酪農をやっていた。

やがて、土地や、稲の品種が改良され、栽培^{さいばい}技術が進歩して、寒い地方でも米がたくさんとれるようになった。村を縦断する灌漑水路が開削^{かいさく}され、大川沿いの畑や牧草地は、ほとんどが水田と化した。一郎の家で稲作をはじめたのは、このころである。

米は、政府が高い価格でかならず買いあげてくれた。たとえ五年に一度の冷害をうけたところで、確実に損失をとりかえすことができるのだ。

ところが、ここ数年、日本じゅうで米がとれすぎ、米があまるようになった。政府は、米をやめてほかの作物にかえることをすすめて、米の買いあげ数量を制限したり、補償^{ほしょう}金を出して稲作を休ませたりして、米の生産を減らそうとした。

今まで農民たちは、ひたすら米の増産を目ざして、努力を重ねてきたのである。ここにいたって、その目標が失われた。

(岡部彰 『北海道の牧場で』による)

問一

ア にあてはまる語として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 冷やか
- 2 さわやか
- 3 にぎやか
- 4 軽やか

問二

――部1「こま粒のように」とありますが、この表現は何のどのような様子を表していますか。また、このような表現技法を何といいますか、答えなさい。

問三

――部2「思わずその場に立ち止まった」とありますが、どうして「一郎」は「その場に立ち止まった」のですか、その理由として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 父親たちがまじめな話をしているので、なんとなくその様子を観察してみたいと思っただけから。
- 2 父親たちが仕事の話をしているので、大人の話に割り込むとひどく怒^{おこ}られると思ったから。
- 3 父親たちが深刻そうに話をしているので、そばに行けるような感じではなかったから。
- 4 父親たちが自分の話をしているので、気持ちが落ち着かなくなってしまっていたから。

問四

――部3「凶作」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問五

――部4「たんばのあぜ道に古タイヤをならべて」とありますが、なぜこのような行動をしているのですか、その理由を説明しなさい。

問六

――部5「四方八方」の使い方として、正しくないものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 天気が四方八方から変わっている。
- 2 大きな山に四方八方囲まれている。
- 3 悪口が四方八方から聞こえてくる。
- 4 ばらの花が四方八方に咲いている。

問七

――部6「酪農をやるんだ」とありますが、なぜ父はそのようなことを言ったのですか、「稲作」・「酪農」・「政府」の語を用いて説明しなさい。

問八

——部7「言葉が出ない」とありますが、このときの一郎の心情を表す二字の熟語として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 不安 2 驚き 3 安心 4 喜び

問九

本文の内容として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 年は少し離れているが、山本君と一郎は仲のよい友達であり、お父さんから頼まれた木の実を採りに山の中に出かけた。
- 2 北海道では酪農が主であったが、稲作ができるようになり、一郎の家でも酪農から稲作に切り替えたことがあった。
- 3 農業で生活することはきびしいので、大都市に働きに行く人が増えており、一郎の父親も考え始めている。
- 4 秋が近づくに連れて、熊が冬眠をする準備をはじめるので、人里でも警戒が必要となっている。